



International Institute of Multi-Cultural Studies

特定非営利活動法人

国際比較文化研究所

■ Newsletter ■

Vol. 16 No.2 2015年 11月

見えないものを信じる

群馬県立女子大学
国際コミュニケーション学部4年
菅谷佳名子

8/10(月)～8/22(土)、ぐんまカップの招聘プログラムを無事に実施することができました。インドネシアと同じかそれよりも暑い真夏の群馬を舞台にしたぐんまカップ招聘プログラム。みんなで



「ただいまー！」や「いただきまーす！」を繰り返していた毎日。様々な国籍の人が集まってもみんなが日本語で話す不思議な光景。4人の日本に対する興味の強さに驚いたり、日本の文化・社会についてうまく答えられず情けなくなったり。今まで知らなかった群馬の魅力に心を弾ませたり、プログラムを応援してくださる大人の方々のあたたかさに感動したりもしました。

「海外で日本語コンテストをやる。審査員は学生。上位者を群馬に連れて来て交流する。1回目はインドネシアで。ぐんまカップって名前、どう思う？君に代表を任せたい。」そう太田先生に言われたのは、2014年の梅雨明け間もないころでした。面白そう！そう思った私は代表を引き受けることになったのです。

そこから始まった「本当にできるの？」という問いとの戦い。開催にあたって、用意されているものはひとつもありませんでした。招聘する資金も、コンテスト会場も。あったのは「これは実現したら楽しい！」という情熱だけでした。

代表を引き受けるにあたって原動力となったことがいくつかあります。ひとつは同世代の日本語学習者と日本語母語者の接点が少ないということ。日本人があまり留学しないインドネシアではそれが顕著でした。「先生以外で話した日本人はあなたが初めて。」そんな学生がたくさんいるのです。同じ学生として、日本人として、びっくりしました。それなのにどうしてここまで語学に熱

心になれるの？生きた日本語を友達として話す機会があれば、インドネシアの学生にとってどれだけプラスなことだろう？日本の学生はどれだけ世界が広がるだろう？

もうひとつは、私達の見えないところで世界が繋がっているということ。聞こえはいいことです。政治や経済は戦略的にグローバル化が進んでいます。これには様々な意見があると思います。わたしは大きな流れだけではなく、もっと温度のある人と人がつながっていかないと、1人1人にとって世界はせまく、遠い存在になってしまうのではないかと考えるようになりました。

最後は群馬でやるということ。羽田空港についたと思ったらすぐバスに寄せられて、群馬へ。東京に憧れを持つインドネシア人学生は後ろ髪を引かれる思いでしょう。でもそこで「群馬最高！」と言わせたい。私は大学進学をきっかけに群馬にやってきました。正直に言えば、最初はそこまで強い思い入れもなく過ごしていました。しかし誰かとの思い出が増えるごとに愛着が増し、きてよかったと心底思うようになりました。スタッフも招聘生もみんな、群馬をフィールドに遊んで学んで触れ合って、たくさんのかんじを感してほしい。そう思いながら企画をしました。

同じ思いを持つスタッフに恵まれ、共感してくださる皆様に支えられ、第1回目をかたちにすることができました。海外で日本語を勉強する私たちと同じ学生たちの本気のメッセージを日本語コンテストで受け取って、群馬を舞台にひと夏と一緒に過ごすぐんまカップ。情熱だけで始まったぐんまカップですが、片づけが苦手でおしゃべり大好きなニナ、泣き虫だけど芯のあるマリア、オンオフの違いが激しいアグン、以外に怖いもの知らずなメタと過ごした夏としてかたちにすることができました。「日本人とインドネシア人の交流会」ではなく、1人1人が個性を持ってそれぞれと友達として過ごせた日々だったと言えます。いつかの帰り道、みんなが仲良く歩く後ろ姿を見ながらそう思ったのでした。

私たちは、世界は広くて近いという感覚が、また逢いたい人が世界に居るといことが、1人1人が今ある世界をよりよくすることへの行動につながっていると信じています。体を動(p.2へ続く)

(p.1 より)かすかどうかは自分たち次第。これが本当のはじまりです。「学びを活かす」なんてことではなく、友達に会いに行く。それくらいの身軽さで動き出していきます。その成果は今すぐには目に見えないものだと思いますが、まだ見えないものを信じる力こそ、わたしが研究所で学んだことです。

何も持たない私たちにご支援くださった皆様、本当にありがとうございました。企画運営を通し、0を1にする作業は、いきなり1になるものではないと実感しました。誰かが持っている0.1や0.01をたくさん集めて1にする。研究所が積み重ねてきたもの、メンバーが個々に感じてきたこと、インドネシア人学生の日本が大好きという気持ち、数えきれないほどの応援。気持ちだけではどうにもならなかったことを、このように肌触りのあるプロジェクトとして実現できたことに心よりお礼申し上げます。そしてこの企画を任せてくださった太田先生に心より感謝いたします。



国際比較文化研究所創立15周年記念企画「ぐんまカップ」発足当初のスタッフ。高崎駅前で記念撮影をしました。この5人の内2人は既に社会人。後2人は今年度で卒業です。



コンテスト終了：参加者・スタッフ入り乱れての記念写真です。

てきた「多文化交流 in マラン」のスタッフや参加者がコンテストの大きな力となってくれました。そのお陰も有って温かいコンテストが出来ました。



コンテスト勝者が招聘され、群馬県庁に表敬訪問に行ったときの写真です。全員が最もフォーマルに装ったときです。



けれども、ぐんまちゃんを囲んでのこの写真の方が、遥かに彼らしい表情ですね。



多くの出会いを経て、あっという間に時は経ち羽田空港でお別れです。ここから本当の交流・生涯続く交流へと発展してくれることを祈っています。

今まさに、第二回のぐんまカップが始まろうとしています。皆様のお力添えをお願いします。

(写真コメント：太田敬雄)

多文化交流 in ぐんま 2015 夏

群馬県立女子大学2年
柴田なつみ



初めて多文化交流 in ぐんまに参加してから早一年がたちます。大学に入学してすぐ何もわからないままスタッフになり、ついに三回目のスタッフとなった「in ぐんま2015夏」で、きみこと中島愛

と一緒に共同代をやらせてもらいました。一年前の自分は代表をやるなんて、スタッフを三回も続けるほど多文化が大好きになるなんて、まったく想像していませんでした。今まで多文化の先輩であるお姉さまお兄さま方からさんざん聞かされていた「多文化中毒」状態、今ではわたしもわかります。完全に多文化中毒者です。

スタッフとしてのお仕事は、本番の三か月前から始まります。テーマを決め、企画を考え、イベントの広報をして、やることは盛りだくさんです。今回は代表として頑張らなくちゃ！と思う一方、今までの多文化が楽しかっただけにプレッシャーを感じたり、自信をなくしたり、、、会議が始まって最初の頃から、いつも誰かに助けられてばかりでした。多文化スタッフ会議のいいところは、みんなが思ったことをすぐに言い合えるところです。毎回回数を重ねるごとにどんどん意見が飛び交うようになって、代表はまとめるだけ。本当に毎回、多文化スタッフにぴったりな人が集まってきてすごいなと思います。そんなメンバーに囲まれたおかげで、不安に思っている時間がもったいなく感じました。今回は今まで以上に楽に、思いっきり楽しめたと思います。本当にありがとうございました。

違いにびっくりしたり、同じだね！って盛り上がりたり、あいさつを教えてもらったり、たまに意味も分からないまま悪～い言葉を教わったり？、、、たったの三日間の間に、いろんな感情や思い出がぎゅっと詰まっています。ひとつひとつが今でも鮮明です。そんな中で私が一番印象的な瞬間は、お別れの時です。日本国内にいるけどめったには会えないような人たち、母国に帰ってしまう留学生たちとお別れはさみしいはず、なんです！多文化で出会った人たちはみんな、(根拠はないのに)また絶対にどこかで会う確信があるので悲しいお別れにはならないんです。参加してみないとわからない、不思議な感覚です。これが、よく太田先生がおっしゃる「このイベントの終わりはスタートなんだよ」という言葉の意味なんだろうなと思います。そして、毎回多文化が終わるたびに、ああ～もう一回この気持ちになりたい～またみんなに会いたい～と思うんです。エンドレスです。

この感覚をもっとたくさんの人たちに味わってほしいです。

多文化交流に参加することで、たくさんの方の参加者と友達になりました。世界には、家でニュースを見てるだけではわからないだけではわからない、私の知らない世界がたくさんありました。今度は私がみんなの国へ行って、実際に見て、一緒に時間を過ごして、もっと知りたいと思いました。これから、多文化のおかげで始まっていく「つながり」が本当に楽しみです。

スタッフを経験したことで、これからもずっと繋がっていきたいと思う人たちに出会うことができました。今まで一緒にスタッフを経験したわきさん、らぐ、まつ、きみこ、こうちゃん、ねぎ、ぼんさん、ごうちゃん、あいり。そしていつもスタッフに力を貸してくれる多文化の先輩たち。そしてそしてもちろん、当日参加してくれる参加者のみんな。これからの私の人生でずっと大切な存在です。そんな人たちに引き合わせてくれた太田先生には大感謝です。もう私はばっちり多文化中毒者の仲間入りを果たしたので、これからどんな形でもずっと、多文化交流に関わり続けていきたいです。

「かけがえのない宝物」

高崎経済大学3年 齋藤恒平



一年生の時に誘われて始めた多文化スタッフ、見事にその楽しさにはまり気づけば今回で4度目となりました。先輩たちに面倒を見てもらい迷惑をかけながらやっていた私ももう三年生。今や最年長として後輩たち

の面倒を見る立場になっていました。今回、自分よりももっとしっかりした後輩たちがスタッフを取りまとめる立場にいたので、あまりでしゃばる機会もないだろうと思いを緩めていました。それが災いし見事に後輩たちに迷惑をかける結果となり、年長の威厳はどこへやら…。しかし失敗やハプニングなども全部含めて多文化交流でありすべて大切な思い出です。

回を経るごとに感じることは、多文化交流への参加者の募集が、より短期間で定員に達すること、過去に参加してくれているリピーターが増えているということです。それだけ多文化交流に興味を持ってきている人、自分のように楽しさから抜け出せなくなった人が増えているということです。もっともっと多くの人たちが、自分とは違う文化の中で生きる人でも解り合うことができる、ということを知ってほしいです。今、隣国との国交に関する事で問題に (p.4に続く)

(p.3 より) なっていますが、ニュースを見るたびにそんな人たちばかりではない、私の友達はみんな良い人なのに、と思います。メディアに惑わされず、実際に異文化に触れてみれば、解り合えない人たちなどいないのではないかと考えざるを得なくなります。自分の友達がいる国は自然と好きになるし、興味を持ちます。これが世界平和に繋がると信じています。そういった点で、この多文化交流は、草の根外交の役割も担っていると思っています。

微力ではありますが、このような素晴らしい活動に関わってくることができて、本当に幸せでした。活動を通して知った異文化や得た人材はかけがえないものです。自分は三年生なので今後は活動を続けることは難しいかもしれませんが、何らかの形で関わっていただけたいと思います。私の大学生活は多文化無しでは語れないほど濃く、有意義な時間でした。この交流で出来た輪がこの先もずっとつながり続けることを願います。



多文化交流の大先輩、キム・サヨン、福崎結子夫妻が赤ちゃんを連れて顔を出してくれました。



長年多文化交流を実施してきて感じていることの一つは会場がプログラムの質にまで影響するという事です。「多文化交流 in ぐんま」にとって、安中市の学習の森は外すことの出来ない最高の交流の場を提供してくれます。

まなばるの子ども達も合流しての第二日：普通では中々無い多文化・多世代交流が自然に出来る不思議！

多文化交流 in ぐんま 2015 夏を終えて

群馬県立女子大学 2年

中島 愛



わたしが初めて多文化交流に参加したのは大学1年の夏。本当に偶然、今回も一緒にスタッフを務めた仲間から多文化交流というものを教えてもらい、スタッフとして関わることができました。そこから、あれは偶然ではなく何かの巡り合わせだったのだと感じるほどに、多文化交流にどっぷりはまっていきました。2014 夏と2015 冬の in ぐんまのスタッフ、in マランでは参加者として、そして今回の in ぐんま 2015 夏で4度目の参加となりました。何度参加しても多文化はすべて全く違う色を持っていて、一概に多文化といっても毎回新しい刺激を与えてくれます。ただ全ての多文化に共通することもあり、これが特にわたしが多文化にハマってしまった理由でもあると思うのですが、まず1つはスタッフも含め全員が参加者であるということ。多文化においてスタッフと当日集まってくれたみんなとは作る側とお客さんでは決してありません。みんなが参加者、みんなで作りに上げていく、そうできるからより一体感が生まれ、毎回全く色の違う多文化になるのだと思います。これは多文化の魅力の1つだと思います。そしてもう1つは、多文化、そこが交流のスタート地点だということ。多文化交流が楽しかったと言ってもらえること、みんなの笑顔が見れることはすごく嬉しいです。でもそこで終わらせないのが多文化。せっかく出会えたのに、ああ楽しかったという思い出だけにとどめてしまってもったいない。でもここからしっかり繋げていき、より強く深い絆が築かれる。これこそが多文化の醍醐味。太田先生がおっしゃっていた、世界中の人がみんな友達になれば本当の平和が訪れるということは、本当にその通りなのだろうと思っていて、実現したら最高です。わたしの世界を広げてくれる多文化交流。多文化に魅了され、OG・OBの言葉を借りれば、いつのまにか多文化中毒者になっていました。そんな多文化交流をこれからもずっと大切にしたいと強く思います。



～お詫びとご報告～

今年度、5月に第1号のニューズレターをお送りしてから、第2号の発行は総会後の7月に計画していましたが、9月に延び、ついに11月になってやっと発行することになってしまいました。しかも、今号でもまだ本来直ちにご報告すべきな総会報告も出来ずにおりますことをお詫び申し上げます。正式な総会報告は、後日に改めてお届けしますが、大事なことが有りますので、ここでご連絡申し上げます。

第1点は、総会において理事定数に関する定款の改定が承認されました。これまで理事は10名以内」と定めておりましたが、「8名以上」と改定しました。その上で第2点として新たに理事を選出しました。

これまで理事をお願いしておりました森泉寿義雄氏が辞任されたため、後任に関橋賢氏（日本キリスト教団原市教会牧師）をお願いし、さらに次の5名の方に理事として加わっていただくことが承認されました。

まずはこれまで研究所の海外プロジェクト担当の副所長をお願いしておりました、菅ヶ谷マコ氏。インドネシアのマラン在住ですが、理事会にはスカイプ等でご参加いただくこととして理事に加わって頂くことにします。

さらに、これまでの多文化交流で企画や運営、引率などを担当して頂いた若い力として次の方々にも理事に加わっていただきました。既に大学を卒業して働いて居られる今井望さん（群馬県立女子大卒）、清水理沙さん（群馬県立女子大卒）、岸綾夏さん（高崎経済大学卒）、そして今号の巻頭原稿を寄せていただいた現在群馬県立女子大4年生の菅谷佳名子さんの4名の皆さんです。

<上毛新聞>



これまでの理事の皆様と共に力を合わせて、次の時代を担う国際比較文化研究所を作り上げていただけていただけると期待しています。

なお、今年度は理事の任期途中ですので、来年の総会が改選の年となります。現在任期中の理事は野口紀子氏、伊藤成氏、関千景氏、狩野真由美氏、金井美由紀氏、福田則行氏、太田琢雄氏、太田敬雄です。また、監事は木村隆氏、幸田一彦氏です。

会費とご寄附のお願い：2015年度が始まって

一度しかニューズレターをお送り出来なかったため、会費とご寄附のお願いも出来ずに今日に至っております。

研究所の活動は、基本的に皆様からの会費とご寄附によって支えられていますので、これまで同様に会費・ご寄附でお支え下さいませようお願いします。会員以外の方も、数年に一度で結構ですから、ニューズレター郵送代程度で結構ですからご寄附をお願いできれば幸いです。

さらには、学生会員だった方で、卒業された皆さんにはぜひ会員となって国際比較文化研究所の活動を支えてください。

会員 年会費：2,000円

ご寄付につきましては、同封の振込用紙に次のいずれかの分野をお願いします。

一般、インドネシア招聘、まなぼる、多文化交流、ぐんまカップ



会費・寄付・新入会員（2015年5月10日～2015年11月14日）敬称略

＜入会＞学生会員：根岸大輔（高崎経済大学）、福光真優（高崎経済大学）鈴木奏人（常葉大学）、田形健（常葉大学）、中西祐香（常葉大学）、ナガオ・マイシャ（常葉大学）、友田愛紀（常葉大学）、福嶋梨帆（常葉大学）、増井奈都乃（群馬県立女子大）、数馬周平（高崎経済大学）、矢吹真佑（常葉大学）、大石真里奈（常葉大学）。

一般会員：関橋賢、清水理沙、今井望、増井杏奈。

＜会費＞ 真下東雄、関口澄、金井美由紀、金井優季、清水理沙、関橋賢、清水理沙、今井望、幸田一彦、狩野真由美、太田敬雄、太田琢雄、恩幣宏美、板垣剛（13.14.15）、阿部洋一、木暮道子、村井田和夫、菅ヶ谷純弘、菅ヶ谷由美子、吉田省史郎、佐藤貴雄、村田元、斎藤宏、堀越美津子、中村紫乃、キャンディ、野村誠、土屋操、斎藤和子、斎藤正典、永田強一、伊藤成（14,15）、内田穂積、小林慎樹、本島靖子、狩野郁子、増井杏奈、長谷川昇、徳増弘子、木村隆、木村真理子、熊倉浩靖、伊藤優子、柴山享、山崎恵美子、久米博之・史可、加納武、青葉由香（14,15）、福田英作、川口知幸、新井隆（14,15）

＜寄付＞

○一般寄附 真下東雄、萩原和子、金井美由紀、幸田一彦、狩野真由美、太田敬雄、太田琢雄、伊藤成、福田則行、関千景、鬼頭考子、野口紀子、村井田和夫、清水智子、菅ヶ谷純弘、菅ヶ谷由美子、吉田省史郎、堀越美津子、原啓太、中村紫乃、キャンディ、野村誠、斎藤和子、斎藤正典、伊藤成、内田穂積、長谷川昇、柴山享、鈴木ゆかり、萩原俊治、久米博之・史可、福田英作、川口知幸、

○まなばる 板垣剛（x3）、木暮道子、小林慎樹、柴山享、

○招聘 木暮道子、

○多文化交流 柴山享、

○ぐんまカップ寄付 松原辰宣、

○ぐんまカップ助成金 国際交流基金

《編集後記》

10月末、アメリカの母校、North Central College のホームカミングに行ってきました。卒業して 50 年。集まった同級生は皆老人でした！ほぼ同い年ですから当然ですが、50 年前の悪童を見て、しみじみと年月を感じました。

右の写真は母校のキャンパス。とは言っても大学の敷地に囲いが有りませんから、左の通りは厳密には大学の外です。

紅葉の真っ最中で、私が通った大学はこんなに紅葉の美しい所だったのかと初めて意識しました。学生時代、私は一体何を見ていたのだろうか？この美しさは私の記憶には有りませんでした。

歳を経て、若き日々を過ごした所を訪ねて見ると、皆さんも意外な発見があるかもしれませんね。

T



発行 特定非営利活動法人国際比較文化研究所

事務所：〒379-0124 群馬県安中市鷺宮 3413-3

電話：027-382-5998 FAX：027-382-6393

研究所ホームページ：<http://www8.wind.ne.jp/mthc>

まなばる：<http://manapal.gunmablog.net/e80854.html>

郵便振替口座番号：00510-1-61974

加入者名：国際比較文化研究所